

# 2003年世界体操競技選手権大会における 跳馬・段違い平行棒の演技構成に関する一考察

山田 まゆみ

## I. はじめに

体操競技では、通常オリンピック終了後に国際体操連盟（FÈDÉRATION INTERNATIONALE DE GYMNASTIQUE 略称：F.I.G.）によって採点規則の改定が行われ、次のオリンピックまでの4年間は同じ採点規則を適用して競技が行われる。しかし、シドニーオリンピック後に改定された2001年版採点規則は、途中で小さな修正を行いながら8年間適用することを視野に入れて作成されている。したがって8年間適用しても世界の上位選手の序列が付けられるように非常に難しい規則となっている。すでに女子では1年目に部分的な規則の改定があり、2002年版の採点規則として現在に至っている。

2003年8月にアメリカ・アナハイムにて世界体操競技選手権大会が開催された。この大会の上位12位チーム（60名）の演技価値点を見ると、10点満点の価値点を与えられた選手は跳馬1名、段違い平行棒15名、平均台3名、ゆか4名であった。規則が大改定されて3年経過しているにもかかわらず、価値点で10点満点を与えられた選手は非常に少ない。したがって各国の選手が高得点を獲得することは非常に難しい状況になっている。

この大会は、アテネオリンピックの団体出場権を獲得するために重要な大会であったが、日本女子チームは、アテネオリンピックの団体出場権を獲得することは出来ず、個人2名の出場権を得るにとどまった。また、今まではオリンピックの前年に開催される世界選手権大会によってオリンピックの出場国を決定していたが、今後は、オリンピック開催2年前の世界選手権大会で一度予選を行い、出場国を絞った上でオリンピックの前年に出場権を獲得するための

世界選手権大会が開催されることになっている。このようにF.I.G.の事業計画が変更されたことにより、北京オリンピックに向けての強化活動は、非常に短い間に結果を出さなければならない。したがって日本は今まで以上に的確な強化方針と着実な強化活動が必要になる。それだけに、この大会全般に関する分析を十分に行い国際動向を把握することが大切である。

2003年に開催された世界体操競技選手権大会に於いて、日本と世界の演技が明らかに異なるのは跳馬と段違い平行棒であった。この2種目において各国の現状を把握すると共に選手の演技構成を比較考察することにより、具体的にどのようなところに差があるのかを明らかにし、今後の強化の課題を提示すると共に審判活動に寄与することを目的に本研究を行った。

## II. 方法

研究対象として、2003年アナハイム世界体操競技選手権大会女子団体予選（競技I）に出場し、上位16位までのチームを対象とした。先にも述べたように、オリンピックの出場権を得られたのは上位12チームである。しかし競技Iの結果、上位16位までが僅差の中で順位が決定されているために上位16チームを研究対象とした。競技Iの結果は表1-4参照。

資料は、世界選手権大会に於いて選手の演技価値点を決定するA審判の演技記録を基に作成し考察を行った。跳馬88演技、段違い平行棒80演技を考察の対象とし、資料作成に関しては、チーム得点に貢献したベスト4に入った選手を選出し、跳馬・段違い平行棒共に64名を対象とした。

### III 結果及び考察

#### 1. 跳馬

跳馬の演技に対する特別要求は、以下のような内容がある。

- ー 予選、団体決勝、個人総合決勝での演技は、1回の跳躍とする。その1回の跳躍の得点が有効点となる。
- ・ 予選で選手が種目別決勝への出場を望むなら、2回目の跳躍を1回目とは異なる跳躍技グループから実施しなくてはならない。この場合、2回の跳躍の平均点が種目別決勝への予選の有効点となる。団体決勝と個人総合へは予選の1回目の得点が有効点となる。

跳馬に於いて種目別選手権大会への出場を希望し、競技Iにおいて2本の跳躍を実施した選手は、上位16チームの中ではルーマニア(ROM)1名、ウクライナ(UKR)1名、ロシア(RUS)3名、フランス(FRA)1名、北朝鮮(PRK)1名、イタリア(ITA)1名の合計8名であった。

#### 1) 跳躍技について

各チームのベスト4の跳躍技を見ると、表1-1より価値の一番高い跳躍技は、ロンダート後転とびー後方伸身宙返り2 $\frac{1}{2}$ ひねり・価値点10.00である。

グループ別に見ると、グループ2(第1空中局面で1回ひねりを伴う、または伴わない倒立回転とびー第2空中局面でひねりを伴う、または伴わない前方または後方宙返り系)の跳躍技を8名の選手が実施した。前転とびー前方屈身宙返り系の跳躍技が2種類、伸身宙返り系の跳躍技が2種類実施されている。その中で一番多く実施されたのは、前転とびー前方屈身宙返り $\frac{1}{2}$ ひねり・価値点9.60で、5名実施している。

グループ3の跳躍技の実施は1名のみで、ツカハラとび2回ひねり・価値点9.90である。

グループ4(ロンダート〜第2空中局面でひねりを伴う、または伴わない前方または後方宙返り系)の跳躍技では、ロンダート後転とびー後方伸身宙返り1回ひねり・1 $\frac{1}{2}$ ひねり・2回ひねり・2 $\frac{1}{2}$ ひねりの4種類が実施され、このグループの跳躍技を実施した選手は35名と一番多い。この中でロンダート後転とびー後方伸身宙返り1 $\frac{1}{2}$ ひねり・価値点9.70は24名実施し、これは全体の37%を占め今大会で一番多くの選手によって実施された跳躍技である。

グループ5(第1空中局面で $\frac{1}{2}$ または1回ひねりを伴うロンダート〜第2空中局面でひねりを伴う、または伴わない倒立回転とび、または前方/後方宙返り系)の跳躍技は20名の選手が実施し、ロンダート後ろとび $\frac{1}{2}$ ひねりー前方宙返り系の跳躍技が3種類、ロンダート後ろとび $\frac{1}{2}$ ひねりー $\frac{1}{2}$ ひねり後方

表1-1 跳躍技の分布

グループ	跳 躍 技	価値点	跳躍数
2	前転とびー前方屈身宙返り	9.4	1
2	前転とびー前方屈身宙返り1 $\frac{1}{2}$ ひねり	9.6	5
2	前転とびー前方伸身宙返り	9.6	1
2	前転とびー前方伸身宙返り1回ひねり	9.7	1
3	伸身ツカハラとび2回ひねり	9.9	1
4	ロンダート後転とびー後方伸身宙返り1回ひねり	9.4	1
4	ロンダート後転とびー後方伸身宙返り1 $\frac{1}{2}$ ひねり	9.7	24
4	ロンダート後転とびー後方伸身宙返り2回ひねり	9.8	9
4	ロンダート後転とびー後方伸身宙返り2 $\frac{1}{2}$ ひねり	10	1
5	ロンダート後ろとび1 $\frac{1}{2}$ ひねりー前方屈身宙返り	9.5	1
5	ロンダート後ろとび1 $\frac{1}{2}$ ひねりー前方屈身宙返り1 $\frac{1}{2}$ ひねり	9.7	3
5	ロンダート後ろとび1回ひねりー後方屈身宙返り	9.7	12
5	ロンダート後ろとび1 $\frac{1}{2}$ ひねりー1 $\frac{1}{2}$ ひねり後方屈身宙返り	9.7	1
5	ロンダート後ろとび1回ひねりー後方伸身宙返り	9.8	2
5	ロンダート後ろとび1 $\frac{1}{2}$ ひねりー前方かかえ込み1 $\frac{1}{2}$ ひねり	9.9	1

宙返り系の跳躍技が1種類、ロンダート後ろとび1回ひねり－後方宙返り系の跳躍技が2種類実施され、跳躍技の種類は6種類と一番多い。この中で一番多く実施されたのは、ロンダート後ろとび1回ひねり－後方屈身宙返り・価値点9.70で、12名の選手が実施している。これは全体の18%となり、今大会において2番目に多くの選手によって実施された跳躍技である。

全体を見ると、ロンダートからの跳躍技(グループ4と5)は55名の選手が実施し、全体の85%を占めている。このことから、現在の跳躍技の主流は、間違いなくグループ4と5のロンダートからの跳躍技であるといえる。

## 2) 価値点と減点について

表1-2より、価値点の平均値が9.70以上の国は、16カ国中11カ国である。その中で価値点の平均値が9.70の国が最も多く中国(CHN)・アメリカ(USA)・ウクライナ・オーストラリア(AUS)・カナダ(CAN)の5カ国である。チームとして最も高い価値点を有しているのは北朝鮮で9.825、最も低い国はブラジル(BRA)とイギリス(GBR)で9.60である。日本(JPN)の価値点の平均値は9.675で16カ国中12位であった。

表1-2 各国のベスト4の価値

順位	国名	選手1	選手2	選手3	選手4	平均値
1	PRK	9.800	10.00	9.700	9.800	9.825
2	RUS	9.700	9.800	9.800	9.900	9.800
3	FRA	9.700	9.700	9.800	9.900	9.775
4	ROM	9.700	9.800	9.800	9.700	9.750
5	ESP	9.700	9.700	9.800	9.700	9.725
5	ITA	9.700	9.700	9.700	9.800	9.725
7	CHN	9.600	9.700	9.800	9.700	9.700
7	USA	9.700	9.700	9.700	9.700	9.700
7	UKR	9.700	9.700	9.700	9.700	9.700
7	CAN	9.700	9.700	9.700	9.700	9.700
7	AUS	9.700	9.700	9.700	9.700	9.700
12	JPN	9.600	9.700	9.700	9.700	9.675
12	NED	9.700	9.600	9.700	9.700	9.675
14	GER	9.700	9.700	9.600	9.600	9.650
15	BRA	9.400	9.700	9.500	9.800	9.600
15	GBR	9.700	9.600	9.700	9.400	9.600

表1-3より、減点が最も少ないのはアメリカで、平均値は0.403(小数第4位を切り捨て)である。アメリカは価値点で7位の順位になっているが、減点が非常に少なかったために跳馬のチーム得点順位は3位と価値点の順位より上昇している。

ロシアの減点の平均値は0.425、減点の順位は3位(減点の少ない国を上位とする)である。価値点では2位の順位になっている。跳馬の得点としては、価値点が高く減点も少ないためにチーム得点順位では1位になっている。

北朝鮮の減点の平均値は0.434、減点の順位は4位である。価値点では1位になっており価値点の高さによりチーム得点順位は2位になっている。

日本は、減点の平均は0.590、減点の順位は14位である。価値点では12位であるが、減点が多いため跳馬のチーム得点順位は16位と後退している。

最も減点が多いのはフランスで、減点の平均値は0.706、減点の順位を見ると16位と最下位である。価値点では3位の順位になっているが、減点が多いため跳馬のチーム得点順位は10位と大きく後退している。

北朝鮮とロシアの2チームは、価値点が高く、実施減点が少ないことから、跳躍の完成度が高いことが理解できる。特にロシアは、種目別選手権大会出場の

表1-3 各国のベスト4の減点  
(減点の少ない国を上位とする)

順位	国名	選手1	選手2	選手3	選手4	平均値
1	USA	0.488	0.350	0.400	0.375	0.403
2	ROM	0.438	0.413	0.325	0.525	0.425
3	RUS	0.400	0.275	0.375	0.675	0.431
4	PRK	0.538	0.400	0.475	0.325	0.434
5	UKR	0.463	0.438	0.413	0.475	0.447
6	BRA	0.475	0.588	0.513	0.388	0.491
7	CHN	0.513	0.475	0.438	0.800	0.556
8	NED	0.613	0.525	0.588	0.525	0.562
9	GBR	0.713	0.525	0.475	0.550	0.565
10	ESP	0.663	0.563	0.600	0.450	0.569
11	GER	0.650	0.625	0.525	0.488	0.572
12	CAN	0.650	0.613	0.475	0.575	0.578
13	AUS	0.638	0.500	0.538	0.650	0.581
14	JPN	0.525	0.575	0.725	0.538	0.590
15	ITA	0.738	0.850	0.538	0.513	0.659
16	FRA	0.813	0.825	0.675	0.513	0.706

\* 平均値は小数第4位を切り捨て

ために、5名の選手のうち3名が2本の跳躍を実施しており、国として跳馬を非常に強化していることが伺える。

アメリカの価値点はこの大会での平均的数値であるが、実施減点を最小限に食い止めた非常に完成度の高い演技を全員で実施し、価値点の低さを技術でカバーしていることが理解できる。

### 3) チーム得点の順位

表1-4より、競技Iと跳馬の順位を見ると、北朝鮮は競技Iの順位が12位で跳馬は2位。ロシアは競技Iが5位で跳馬は1位。オランダ(NED)は競技Iが16位で跳馬が10位。これらの国は、競技Iの順位より跳馬のチーム順位が明らかに高い。それに対し、イギリスは競技Iの順位が9位で跳馬が19位。中国は競技Iが1位で跳馬が7位。フランスは競技Iが10位で跳馬が14位。これらの国は、競技Iの順位より跳馬のチーム順位が明らかに低い。特にイギリスは、跳馬での得点の落ち込みが激しい。跳馬の順位では、12位にメキシコ(MEX)が入ってきている。メキシコは、競技Iにおいて、上位16位に入っていないチームである。日本は、競技Iが14位で、跳馬が16位と2ランク跳馬のチーム順位が低くなっている。

これらのことより北朝鮮、ロシア、オランダは、跳馬のチーム得点が、競技Iの順位を引き上げるのに大きく貢献していると言える。なかでも北朝鮮は、跳馬のチーム得点が競技Iの順位を引き上げるための原動力になったことがわかる。それに対して、イギリス、中国、フランスは、競技Iの順位より跳馬のチーム得点の順位が低いことから、他の種目によるチーム得点への貢献度が高かったといえる。特にイギリスは、跳馬の落ち込みが激しいにも関わらずチームの順位は9位となっているため、他の種目の貢献度が著しく高かったと言える。

### 4) まとめ

今大会での跳躍技の傾向は、明らかにグループ4と5の跳躍技が主流となっていたが、グループ4のロングート後転とびー後方伸身宙返り系の技は、鋭い着手により雄大な第2空中局面を保証され、伸身姿勢で実施するために第2空中局面で姿勢に対する減点の適用が少ないという利点がある。

グループ5の跳躍技で主流となっているロングート後ろとび1回ひねりー後方屈身宙返りは、1997年版採点規則から、2001年版採点規則に改定された時に価値点が引き上げられた跳躍技であり、その後多くの選手によって実施されるようになってきた。しかしこの跳躍技では、第2空中局面で着地の先取りのために体を開いて着地に持ち込むことが難しい。したがって採点規則にある「体の開き伸ばし」に対する減点が適用されやすい。このことに関してF.I.G.は、2002年デブレツェン世界体操競技選手権大会と2003年アナハイム世界体操競技選手権大会の審判会議に於いて、この跳躍技を取り上げ第1空中局面でのひねり不足と、第2空中局面における体の開き伸ばしに対する減点の確認をしながら各国の審判員に対して指導を行っているのが現状である。

価値点では、全体の85%の選手が価値点9.70以上の跳躍技を実施していた。このことにより各国チームに於いて、価値点9.70の跳躍を何名実施することが出来るのかが、上位12までの順位に大きく関わり、価値点9.70以上の跳躍を何名実施できるかで跳馬における上位の順位に大きく影響したと思

表1-4 チーム得点の順位

順位	競技I	得点	跳馬	得点	段違い	得点
1	CHN	148.671	RUS	37.48	USA	38.187
2	ROM	148.120	PRK	37.36	CHN	37.499
3	USA	147.697	ROM	37.3	PRK	37.187
4	UKR	146.994	USA	37.19	UKR	37.036
5	RUS	145.572	UKR	37.01	ESP	37.024
6	ESP	145.409	ESP	36.62	BRA	36.587
7	AUS	144.758	CHN	36.57	GBR	36.161
8	BRA	143.946	CAN	36.49	GER	36.124
9	GBR	143.046	AUS	36.47	AUS	36.011
10	FRA	142.835	NED	36.45	ROM	36.011
11	CAN	142.560	BRA	36.44	CAN	35.987
12	PRK	142.198	MEX	36.42	ITA	35.949
13	GER	142.158	GER	36.31	JPN	35.737
14	JPN	141.948	FRA	36.27	RUS	35.474
15	ITA	141.258	ITA	36.26	NED	35.387
16	NED	141.196	JPN	36.24	GRE	35.100
17						
18					FRA	34.762
19			GBR	36.14		

日本は跳馬に関しては、実施減点が多かったこと、実施した技の価値が、上位に入るためのキープポイントとなった9.70に満たなかったことが跳馬でのランクに大きな影響を与えたと思われる。特に演技価値点に関しては、今大会のように各国が僅差の中で勝負をしている時には、0.1の重みは非常に大きいと言える。跳馬のチーム得点は、日本のチーム順位を下げた原因にもなっているので、今後の強化を重点的に取り組まなければならない種目として認識すべきである。

## 2 段違い平行棒

### 1) 棒間移動について

段違い平行棒の演技構成の中には、5つの特別要求を含まなければならない。その中で、棒間移動に関する要求は、「低棒から高棒の1回の棒間移動はB以上の要素」、「もう一方は、高棒から低棒の棒間移動はB要素以上の要素で実施」とあり、少なくとも2回の棒間移動をB以上の要素で実施しなければならない。

表2-1では、各国の合計を見ると、アメリカの7回を除いてすべて8回になっており、4名の選手が

8 回低棒から高棒へ移動をしている事がわかる。実施された技は 10 種類であるが、特別要求を満たすことが出来る B 以上の要素は 7 種類であった。

その中で一番多く実施された要素は、棒下振り出し(足裏支持で)切り返し上移動・C要素であり、43回・33%に当たる。また、後方浮支持回転前振り出し切り返し上移動・C要素も9回実施されている。この2つの要素については、前者は足裏支持で、後者は浮支持で同じ課題の技を実施しているため世界選手権におけるA審判員の記録が明確に記載されていない可能性が高いと考えられる。そのため合計して52回・40%が棒下振り出し、あるいは後方浮支持回転から切り返しを伴った上移動を実施したと考える事が妥当だと思われる。

2 番目に多く実施された要素は、開始技の低棒伸身とび越し上移動高棒懸垂・B 要素であり、33 回・25 %に当たる。

その他の要素は3種類で、次に多く実施されたのは、後方足裏支持回転・高棒懸垂、28回・22%に達している。この要素を全く実施していない国は、アメリカ、イギリス、北朝鮮の3カ国である。アメリカとイギリスは、A要素での棒間移動は1回も実施していない。北朝鮮は、蹲踞を1名の選手が1回実施している。これは採点規則に要素として記載がなく、特有な構成減点として、低棒上にしゃがみ立ちから高棒懸垂になった場合には、0.10の減点とありこれに当てはまる。

表 2-1 低棒から高棒への移動技

[illegible]

表 2-2 高棒から低棒への移動技

技 名	価値	CHN	ROM	USA	UKR	RUS	ESP	AUS	BRA	GBR	FRA	CAN	PRK	GER	JPN	ITA	NED	合計
懸垂前振り出し1/2ひねり 低棒とび越し低棒懸垂	B				1						1							2
逆手前振り下ろし1/2ひねり 低棒懸垂(エジョフ)	D					1							1					2
懸垂前振り出し1/2ひねりとび 低棒倒立	D		4	2	2		1	1	4	4	3	4	1	3	4	2	4	39
後方伸身宙返り下移動低棒浮 支持(パク宙返り)	D	4		2	1	3	3	3					2	1		2		21
合計		4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	64

表2-2では、各国の合計が4になっていることから、4名の選手がそれぞれ1回高棒から低棒へ移動していることがわかる。

実施された要素は、B要素が1種類、D要素が3種類である。特徴的なのは、B要素を実施しているのはわずか2名であり、その他62名・96%はD要素で実施していることである。

最も多くの選手が実施しているのは、懸垂前振り出し $\frac{1}{2}$ ひねりとび低棒倒立の39回・60%である。この要素を4名全員実施している国は、ルーマニア、ブラジル、イギリス、カナダ、日本、オランダの6カ国であり、逆に1回も実施していないのは、中国とロシアである。

その他に、後方伸身宙返り下移動低棒浮支持(パク宙返り)は21回・32%実施されている。この要素を4名全員実施している国は中国だけである。

移動技を見ると、各選手は低棒→高棒→低棒→高棒と移動していることがわかる。アメリカの選手1名のみが演技を高棒→低棒→高棒で実施していた。移動技の主流は、低棒からは棒下振り出しあるいは後方浮支持回転前振り出し切り返し上移動と低棒伸身とび越し上移動高棒懸垂。高棒からは、懸垂前振り出し $\frac{1}{2}$ ひねりとび低棒倒立と後方伸身宙返り下移動低棒浮支持の4要素で、多くの選手によって実施されていることがわかった。

国別にB以上の移動技を見ると、アメリカは低棒からの移動技は4種類、高棒からの移動技は2種類、合計6種類の要素への取り組みが見られた。ウクラ

イナは、低棒からの移動技は3種類、高棒からの移動技も3種類、合計6種類の要素への取り組みが見られた。この事からアメリカ、ウクライナは移動技に関して工夫された変化のある演技構成がチームとして出来ていると言える。しかしそれに対して日本は、低棒から高棒への移動技は棒下振り出し切り返し上移動と後方足裏支持回転-高棒懸垂の2要素しか実施していない。2要素のみしか実施していないのは16カ国中日本だけである。特に、足裏支持回転は移動技としては認められるが、要素自体に移動の技術がなく単なる棒間移動のための手段となっている。したがって特別要求を満たすための要素としては棒下振り出し切り返し上移動のみとなり、全員が同じ要素を実施している事になる。高棒から低棒への移動技でも日本は懸垂前振り出し $\frac{1}{2}$ ひねりとび低棒倒立しか実施していないために、両棒間の移動に関しては、チーム全体が同じ要素を実施しており、構成上の工夫や変化が見られなかった。

## 2) 空中局面を伴うB以上の要素(同一棒を握る)について

特別要求に、「1つの空中局面を伴うB以上の要素(再び同一棒を握る)」の要求がある。

表2-3より、実施された要素は7種類で、D要素が4種類、E要素が3種類である。

実施された回数は88回になり、ウクライナとドイツ(GER)の2カ国のみが各選手1回ずつの実施で特別要求を満たすのみとなっている。その他の国で

は、1～3名の選手が演技の中で2回実施をしている事がわかる。3名の選手が2回ずつ実施しているのは、スペイン(ESP)、オーストラリア、北朝鮮の3カ国である。

多くの選手によって実施された要素は、イエーガー宙返り35回・39%、トカチェフとび越し25回・28%、ギンガー宙返り19回・21%の3種類で、全体では89%を占める。イエーガー宙返りを4名の選手が実施している国は中国、オーストラリア、北朝鮮、オランダの4カ国である。ギンガー宙返りを4名の選手が実施している国は、イギリスの1カ国である。

1カ国で4種類の要素が実施されたのは、アメリカとオーストラリアであり、どちらの国もその内の1要素はE難度であり、積極的な取り組みが見られ

た。その中でもオーストラリアは、実施している回数も多く空中局面を伴うB以上の要素に関しては、16カ国中で一番工夫と変化が見られ、積極的な取り組みがされていると言える。

日本は、今大会の主流であるイエーガー宙返り、トカチェフとび越し、ギンガー宙返りの3つの要素を全て実施しており、空中局面を伴う要素に於いては、世界の主流に沿った平均的な取り組みが出来ていると言える。

### 3) 終末技について

終末技に対する特別要求は次のように示されている。

#### 終末技

- ・ 予選、団体決勝、個人総合決勝はC以上の要素
- ・ 種目別決勝はD以上の要素

表2-3 空中局面を伴うB以上の要素(同一棒を握る)

技 名	価値	CHN	ROM	USA	UKR	RUS	ESP	AUS	BRA	GBR	FRA	CAN	PRK	GER	JPN	ITA	NED	合計
トカチェフとび越し	D	1	2	2	2	1	3	1	3	1	1	1	3		2	2		25
イエーガー宙返り	D	4	2	1	2	3	2	4	1		3	1	4	1	1	2	4	35
ギンガー宙返り	D		1				2	1		4		2		3	3	2	1	19
逆手前振り下ろし1/2ひねり開脚とび越し高棒懸垂(ホルキナ)	D	1		1		1				1								4
後方浮支持回転開脚背面とび越し高棒懸垂(ヒンドルフ)	E			1														1
後ろ振り前方開脚宙返り高棒懸垂(コマネチ宙返り)	E							1	1									2
懸垂前振り後方伸身宙返り11/2ひねり懸垂(ヒリタキス)	E										1	1						2
合計		6	5	5	4	5	7	7	5	6	5	5	7	4	6	6	5	88

表2-4 終末技

技 名	価値	CHN	ROM	USA	UKR	RUS	ESP	AUS	BRA	GBR	FRA	CAN	PRK	GER	JPN	ITA	NED	合計
後方伸身宙返り2回ひねり下り	C						1											1
後方屈身2回宙返り下り	C						1										1	2
前方かかえ込み2回宙返り下り	D		1	2	2			2	2		2	1		1			1	14
後方伸身2回宙返り下り	D	1				1				2	1	2	3					10
1/2ひねり前方かかえ込み2回宙返り下り	D													1	2			3
前方かかえ込み2回宙返り1/2ひねり下り	D				1	1												2
後方かかえ込み2回宙返り1回ひねり下り	D	1	3	2	1	2	2	2		2		1	1	2	1	4	2	26
後方屈身2回宙返り1回ひねり下り	D	1																1
後方浮支持回転とび出しー後方かかえ込み宙返り下り(ムヒナ)	D	1																1
後方シュタルダー倒立ー後方かかえ込み宙返り下り	D								1									1
後方伸身宙返り3回ひねり下り	E														1			1
後方伸身2回宙返り1回ひねり下り	E								1									1
後方伸身回宙返り2回ひねり下り	SE										1							1

表2-4より実施された終末技は13種類で、C要素が2種類、D要素が8種類、E要素が2種類、SE要素が1種類であった。C要素での実施は64名中3名しか見られなかった。中心的な技の価値はD難度であり、全体の90%に達する。

最も多くの選手によって実施された技は、後方かかえ込み2回宙返り1回ひねり下り・D難度で、26名・40%に達した。この要素を4名の選手全員が実施している国は、イタリアであり、この技を全く実施していない国はブラジルとフランスの2カ国である。その他は、前方かかえ込み2回宙返り下り・D難度で14名・21%、後方伸身2回宙返り下り・D難度で10名・15%である。E要素で実施したのは、ブラジルと日本で各1名の選手であり、SEで実施したのはフランスの1名の選手である。

今大会での主流は、後方かかえ込み2回宙返り1回ひねり下りであったが、その中で中国は4名全ての選手が異なる終末技を実施し、終末技への積極的な取り組みが見られた。

#### 4) E 難度と SE 難度について

E 難度と SE 難度は、加点のための部分である。E

難度は単独で実施すれば0.20の加点になり、SE 難度は、0.30の加点になる。また、他の要素と連続して行うことで組み合わせに対しても加点を得られることもあり、価値点を10点に効率よく近づけるためには、是非とも取り組みたい要素である。

表2-5より、E要素、SE要素併せて34回・53%実施されている。その内E要素は12要素、SE要素は2要素である。

一番多く実施された要素は、大逆手前方車輪片手上で1回ひねり逆手懸垂(ビイ)・E要素の10回であり、2番目に多いのは、後方シュタルダー倒立1½ひねりの5回である。

各国の取り組みを見ると、E、SE 難度を全く実施していない国は、ルーマニア、ウクライナ、イタリアの3カ国である。3回の実施があったのは、アメリカ、ウクライナ、ブラジル、北朝鮮、の4カ国。4回の実施があったのは、中国、オーストラリア、オランダの3カ国。5回実施があったのはフランスであり、各国での対応に差が見られた。

個々の技を見てみると、中国と北朝鮮は、大逆手前方車輪片手上で1回ひねり逆手懸垂を3回実施している。フランスでは、後方シュタルダー倒立1½ひね

表2-5 E 難度と SE 難度

技 名	価値	CHN	ROM	USA	UKR	RUS	ESP	AUS	BRA	GBR	FRA	CAN	PRK	GER	JPN	ITA	NED	合計
大逆手前方伸身車輪11/2ひねり倒立	E	1																1
大逆手前方伸身車輪片大逆手1回ひねり逆手倒立(ビイ)	E	3		1	1			1		1			3					10
後方浮支持回転開脚背面とび越し高棒懸垂(ヒンドルフ)	E			1														1
前方浮腰回転前振り出し大逆倒立(リュオ)	E			1														1
後方閉脚浮腰回転1回ひねり倒立	E				1		1	1										3
大逆手前方シュタルダー1回ひねり倒立	E				1				1									2
後ろ振り前方開脚宙返り高棒懸垂(コマネチ宙返り)	E							1	1									2
後方足裏支持回転11/2ひねり倒立(ルッケ)	E							1									2	3
後方シュタルダー11/2ひねり倒立	E										3						2	5
ロンダートー後転とび1回ひねり低棒浮支持(グロフ)	E													1				1
後方伸身宙返り3回ひねり下り	E														1			1
後方伸身2回宙返り1回ひねり下り	E								1									1
懸垂前振り後方伸身宙返り11/2ひねり懸垂(ヒリスタキバ)	SE										1	1						2
後方かかえ込み2回宙返り2回ひねり下り(ファブリチノフ)	SE										1							1
合計		4	0	3	3	0	1	4	3	1	5	1	3	1	1	0	4	34



りを3回実施している。それに対してアメリカ、ウクライナ、オーストラリア、ブラジルの4カ国では、全て実施された要素が異なっており、工夫と変化が見られた。

##### 5) その他の要素について

すでに棒間移動の要素、空中局面を伴う要素、終末

技について述べたが、A要素を除くその他の要素について、各国がどのような要素で演技構成を行っているのかを調べた。

表2-6より、中国は、8つの技の分野から15要素実施し、大逆手前方車輪系が中心となり、大逆手前方シュタルダー倒立系も2要素実施されている。

ルーマニアは、5つの技の分野から10要素実施し、

表2-6 A要素を除くその他の要素  
(棒間移動の要素、空中局面を伴う要素、終末技は除く)

技 名	価値	CHN	ROM	USA	UKR	RUS	ESP	AUS	BRA	GBR	FRA	CAN	PRK	GER	JPN	ITA	NED
ロンダート、後転とび1回ひねり低棒浮支持	E													○			
前とび低棒伸身倒立	D						○	○						○			
前とび1/2ひねり低棒伸身倒立	D											○					
後ろ振り上げ倒立	B	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
後ろ振り上げ倒立1/2ひねり	B	○	○	○	○	○	○	○		○			○	○	○	○	○
後ろ振り上げ1回ひねり倒立	C											○	○				
後ろ振り上げ倒立11/2ひねり	D												○				
懸垂前振り1/2ひねり	B		○														
後方車輪	B	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○
後方車輪1/2ひねり	B	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	
後方車輪1回ひねり	C		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
後方車輪1/2ひねり、逆方向に1回ひねり	C											○					
後方車輪とび1回ひねり	D				○	○		○	○		○			○			
後方車輪11/2ひねり倒立	D		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○		○		
後方車輪2回ひねり	D											○					
大逆手前方車輪	C	○			○			○	○								
大逆手前方車輪1/2ひねり	C	○	○		○		○		○	○			○		○	○	
大逆手前方車輪1回ひねり	D	○	○	○		○	○	○	○				○		○	○	
大逆手前方車輪11/2ひねり	E	○															
大逆手前方車輪片手で1回ひねり逆手懸垂	E	○		○	○			○		○			○				
後方シュタルダー倒立	C				○	○	○		○								○
後方シュタルダー倒立1/2ひねり	C	○		○	○			○	○								○
後方シュタルダー倒立1回ひねり	D	○		○	○	○	○		○		○			○			○
後方シュタルダー11/2ひねり浮支持	D					○											○
後方シュタルダー倒立11/2ひねり	E										○						○
後方浮支持回転	B					○											
後方浮支持回転倒立	C					○									○	○	
後方浮支持回転1/2ひねり倒立	C					○			○					○	○		
後方浮支持回転1回ひねり倒立	D	○							○		○			○			○
後方足裏支持回転倒立	C					○		○								○	
後方足裏支持回転倒立1/2ひねり	C							○								○	○
後方足裏支持回転とうりつ1回ひねり	D			○				○								○	
後方足裏支持回転倒立11/2ひねり	E							○									○
後方閉脚浮腰回転倒立	D				○		○				○						
後方閉脚浮腰回転倒立1/2ひねり	D				○												
後方閉脚浮腰回転倒立1回ひねり	E				○		○	○									
前方シュタルダー1回ひねり倒立	D	○					○										
大逆手前方シュタルダー倒立	D	○			○				○								
大逆手前方シュタルダー倒立1回ひねり	E				○				○								
前方浮腰回転前振り出し大逆手倒立	E			○													
前方車輪	B			○								○					
前方車輪1回ひねり	C	○	○			○	○			○			○		○	○	
合 計		15	10	12	18	16	14	16	15	9	10	10	12	11	11	12	10

後方車輪系が中心となっている。

アメリカは、7つの技の分野から12要素実施され、特に実施された要素の片寄りは見られない。

ウクライナは、6つの技の分野から18要素実施され、16カ国中最も多い。後方車輪系が中心となっているが、大逆手前方車輪系、大逆手前方シュタルダー倒立系、後方シュタルダー倒立系、閉脚浮腰回転倒立系も多く実施されている。

ロシアは、7つの技の分野から16要素実施し、後方車輪系が中心となっている。

スペインは、8つの技の分野から14要素実施し、特に実施された要素の片寄りは見られない。

オーストラリアは、7つの技の分野から16要素実施し、後方車輪系と、後方足裏支持回転倒立系が中心となっている。

ブラジルは、6つの技の分野から15要素実施し、後方車輪系が中心となっている。大逆手前方車輪系、大逆手前方シュタルダー倒立系も多く実施されている。

イギリスは、4つの技の分野から9要素実施し、16カ国の中で一番少ない。後方車輪系が中心となり、他の要素はあまり実施されていない。

フランスは、5つの技の分野から10要素実施し、後方車輪系が中心となっている。

カナダは、4つの技の分野から10要素実施し、後方車輪系が中心であり、他の要素はあまり実施されていない。

北朝鮮は、4つの技の分野から12要素実施し、後ろ振り上げ倒立系と、後方車輪系が中心となっている。

ドイツは、5つの技の分野から11要素実施し、後方車輪系が中心である。

日本は、5つの技の分野から11要素実施し、後方車輪系が中心である。

イタリアは、6つの技の分野から12要素実施し、特に実施された要素の片寄りは見られない。

オランダは、5つの技の分野から10要素実施し、後方シュタルダー倒立系・足裏支持回転倒立系が多く実施されている。

ここでは、各国の選手がある要素を何回実施したのかを調べたのではなく、実施した要素の種類を比

較して見てきた。アメリカ、スペイン、イタリアは、実施した要素の片寄りはなく、いろいろな分野の技への取り組みが見られた。ウクライナとブラジルは、後方車輪系、大逆手前方車輪系、前方／後方シュタルダー倒立系への取り組みが積極的である。中国は大逆手前方車輪系、オーストラリアは後方足裏支持回転倒立系、オランダは後方シュタルダー倒立系への取り組みに秀でている。北朝鮮は後方車輪への取り組みが多いが、16カ国中北朝鮮のみが後ろ振り上げ倒立系への積極的な取り組みをしている。ルーマニア、ロシア、イギリス、フランス、カナダ、ドイツ、日本は、後方車輪系への取り組みが多かった。

#### 6) 価値点と減点について

表2-7より、価値点の平均値が一番高い国は、アメリカと北朝鮮の9.975であり、一番低い国は、イタリアの9.550であった。

価値点の平均値が9.90代の国はアメリカ、北朝鮮、中国、スペイン、オーストラリアの5カ国。9.80代の国はウクライナ、ブラジルの2カ国。9.70代の国はルーマニア1カ国。9.60代の国はフランス、ドイツ、オランダ、ロシア、カナダ、日本の6カ国。9.50代の国はイギリス、イタリアの2カ国であった。

表2-7 各国ベスト4の価値点

順位	国名	選手1	選手2	選手3	選手4	平均値
1	USA	10	9.9	10	10	9.975
1	PRK	9.9	10	10	10	9.975
3	CHN	9.8	10	10	10	9.950
4	ESP	9.8	9.9	10	10	9.925
5	AUS	9.9	9.9	9.8	10	9.900
6	UKR	9.7	10	9.8	10	9.875
7	BRA	10	9.8	10	9.6	9.850
8	ROM	9.7	9.6	9.6	9.9	9.700
9	GER	9.5	9.8	9.7	9.7	9.675
9	FRA	9.6	9.8	9.6	9.7	9.675
9	NED	9.2	9.7	9.8	10	9.675
12	RUS	9.7	9.5	9.8	9.5	9.625
13	JPN	9.5	9.7	9.6	9.6	9.600
13	CAN	9.5	9.4	9.7	9.8	9.600
15	GBR	9.3	9.5	9.5	10	9.575
16	ITA	9.5	9.6	9.7	9.4	9.550

表2-8より減点が最も少ないのはアメリカで、平均値は0.428である。アメリカは価値点でも1位の順位にある。したがってアメリカは価値点が高く減点の非常に少ない完成度の高い演技を4人の選手全員が実施したと言える。同じく価値点が1位であった北朝鮮は、減点の平均値が0.687と16チーム中10位である。価値点の順位が1位であっても減点が多いためにチーム得点は3位になっている。フランスの減点の平均値は、0.984で減点の順位は16位である。価値点では9位であったが、減点が多かったために、チーム得点順位は18位と大きく後退している。最も注目すべきはイギリスで、減点の平均値は0.534、減点の順位は2位である。これは非常に完成度の高い演技を4名の選手が実施したことを示している。しかし価値点の順位では15位と非常に低い順位で、減点が多かったこととチーム得点順位は7位になっている。日本は、減点の平均は0.665、減点の順位は8位である。価値点の順位は13位、チーム得点順位では13位になっている。価値点で日本よりもわずかに高かったロシアは、減点が0.756と多く13位であったため、チーム得点順位は14位であり、日本の方がわずかながら良い結果になっている。

表2-8 各国ベスト4の減点  
(減点の少ない国を上位とする)

順位	国名	選手1	選手2	選手3	選手4	平均値
1	USA	0.425	0.413	0.500	0.375	0.428
2	GBR	0.588	0.538	0.538	0.475	0.534
3	ITA	0.613	0.500	0.600	0.538	0.562
4	CHN	1.000	0.550	0.363	0.388	0.575
5	CAN	0.625	0.550	0.638	0.600	0.603
6	UKR	0.563	0.463	0.963	0.475	0.616
7	GER	0.600	0.700	0.788	0.488	0.644
8	JPN	0.713	0.800	0.600	0.650	0.665
9	ESP	0.713	0.763	0.600	0.600	0.669
10	PRK	0.638	0.575	0.975	0.525	0.678
11	ROM	0.425	1.063	0.738	0.538	0.697
12	BRA	0.875	0.588	0.675	0.675	0.703
13	RUS	1.163	0.788	0.350	0.725	0.756
14	NED	1.050	0.775	0.725	0.763	0.828
15	AUS	1.125	0.788	0.613	1.063	0.897
16	FRA	0.813	1.100	1.150	0.875	0.984

\* 平均値は小数第4位を切り捨て

## 7) チーム得点の順位

表1-4より、競技Iと段違い平行棒のチーム順位を見ると、北朝鮮は競技Iの順位が12位で段違い平行棒は3位、ドイツは競技Iが13位で段違い平行棒は8位になっており、この2カ国は、競技Iの順位よりも段違い平行棒のチーム順位が明らかに高い。反対にルーマニアは競技Iが2位で段違い平行棒は9位、ロシアは競技Iが4位で段違い平行棒は14位、フランスは競技Iが10位で段違い平行棒は18位となり、この3カ国は競技Iの順位より段違い平行棒のチーム順位の方が遙かに低くなっている。日本は、競技Iでは14位であり、段違い平行棒では13位とわずかながら順位が上がっている。これらのことから、北朝鮮とドイツは、段違い平行棒の得点が競技Iの順位を上げるために大きな原動力になったと言える。逆にルーマニア、ロシア、フランスは、段違い平行棒のチーム順位が低いにもかかわらず、競技Iの順位が良いので他の種目がチーム得点を引き上げるのに大きく貢献したと思われる。日本は、わずかながら段違い平行棒のチーム得点が競技Iの順位を引き上げるのに貢献したと言える。

## 8) まとめ

段違い平行棒では、各個人の価値点では、10.00-18名、9.90-6名、9.80-10名、9.70-10名、9.60-8名、9.50-8名、9.40-2名、9.30-1名、9.20-1名であった。価値点9.80以上は34名で、全体の53%になっている。価値点10点の選手が18名・28%に達していることに特に注目しなければならない。跳馬よりも全体的に価値点が高くなっており、今後各国がさらに価値点を高くする方向へ進むのは自明のことである。

演技構成に関して、アメリカは移動技、空中局面を伴うB以上の要素、E、SE要素、その他の要素に於いて、16カ国の中で一番変化に富み工夫され、選手一人一人が個性的な演技構成をしていることがわかった。さらに実施レベルも素晴らしく本大会の段違い平行棒において、構成・実施共に素晴らしいものであった。

今大会に於いて、実施された回数はわずかである

が、注目すべき要素として後ろ振り前方開脚宙返り高棒懸垂、後方浮支持回転開脚背面とび越し高棒懸垂、懸垂前振り後方伸身宙返り $1\frac{1}{2}$ ひねり懸垂の3要素が挙げられる。後ろ振り前方開脚宙返り高棒懸垂は、ダイナミックな技とは言えないが、この技の持つ難しさから、見ている人に対して強烈な印象を与え、後方浮支持回転開脚背面とび越し高棒懸垂と懸垂前振り後方伸身宙返り $1\frac{1}{2}$ ひねり懸垂は、ダイナミックな実施に心を奪われるものがあり、やはり強烈な印象が残る要素である。

#### IV. 今後の展望

跳馬の今後の傾向としては、選手・コーチは高得点に結びつく技を志向するのは自明のことである。

グループ5で、価値点9.80以上の技は、ロンダート後ろとび1回ひねり－後方伸身宙返り、ロンダート後ろとび1回ひねり－後方かかえ込み宙返り1回ひねり、ロンダート後ろとび1回ひねり－後方伸身宙返り1回ひねりの3跳躍だけである。この中で、第2空中局面でかかえ込み1回ひねりを行う技は体の開き伸ばしの減点が適用されるために、この技を今後志向する選手は多いとは思えない。第2空中局面で後方伸身宙返り、または後方伸身宙返り1回ひねりを実施する跳躍技は、ロンダート後ろとび1回ひねりの着手において、今現在の着手技術より鋭く着手が出来、雄大な第2空中局面を作り出すことが出来れば多くの選手がこれらの跳躍技を実施するようになると思われる。しかしそのような着手技術を開発するにはもう少し時間が必要ではないだろうか。それに対し、グループ4では、より発展的な技への取り組みとして、ロンダート後転とび－後方伸身宙返り2回ひねりが多くの選手に志向されるのは自明のことであり、グループ5の跳躍技よりも優位性が高いことは明らかである。

段違い平行棒では、今後さらに多くの選手によって実施される可能性のある要素としては、前方／後方シュタルダー倒立系・大逆手前方シュタルダー倒立系と、前方／後方開脚浮腰回転倒立系・後方足裏支持回転倒立系が挙げられる。これらの要素を積極

的に取り組んでいる国が見られたが、要素の価値が高いこと、技に発展性があること、組み合わせが自由に出来ることなどの理由により今後各国のこれらの要素に対する対応は急速に進むと考えられる。

日本に関しては、今大会に於いて評価できる点は、減点が16チーム中8位のランクにあり、現在の日本の立場に於いて、これは十分に評価すべき内容だと言える。演技構成に関して、空中局面を伴うB以上の要素と、終末技に関しては、16カ国の中で一般的な内容だったと言える。しかし、世界の傾向から極端に遅れている分野は移動に関する要素である。特に低棒から高棒に移動する要素については、16チーム中で一番内容が単純で、他の国々とかけ離れており、それはただ単に移動技だけに留まらず、演技における迫力、あるいはスピードと言ったダイナミックな運動に関係し、見ている人を引きつけるような魅力にも関係してくる。また、演技が後方車輪系の要素で構成されており、先に述べたような新しい傾向の技への取り組みがなく演技が非常に単純であった。今後の取り組みとして、これらの問題点を解決しながら、演技の価値点を引き上げるような努力が必要である。

#### 参考文献

- 1 財団法人 日本体操協会女子体操競技委員会 (2001年)  
採点規則女子 2001 年版  
財団法人 日本体操協会
- 2 財団法人 日本体操協会女子体操競技委員会 (2002 年)  
採点規則女子 2002 年版  
財団法人 日本体操協会
- 3 2003年世界体操競技選手権大会女子A審判員  
2003年世界体操競技選手権大会競技I、跳馬・  
段違い平行棒A審判員演技記録  
FÉDÉRATION INTERNATIONALE DE  
GYMNASTIQUE